

町内学校物語

国吉小の巻(3)

余木 令一

旧校歌の
歌詞の解明
を今月もつ
づけよう。

「夷隅の川
を南(みん
なみ)に

ついでであ
る(念のた
めにおこと
わりしてお

きたいが夷
隅川といつ
ても現在私

たちが見る
いまの夷隅

川ではもろ
歌が作詞さ
に立つてみ

ある) さて
夷隅川の「
あり、城址

位置すけた
みんなみ)と
たのであろ
南部を西か

に折れて町
蛇行しつつ
ている。

昔はいすこ
であつた。明
田川でさえ

とれたとい
るのだから、

るのだから、いま考えると、うそ
のような話である。他はおして知
るべしというところか。夷隅川も
それはとにかくとして、現人の
ごたみんにもれず、現人の若き
たちには想像もできないほどきれ
いであつた。農圃も工場の汚水も
流れこまなかつた。ゴミも汚物も
すてられなかつた。

山の間や広い原野を自由に流れる
自然のすがたであつた。橋という
ものを考へたそとに、原始
に近いすがたといつたついでに、
浅瀬のあるところ、そこには町や
学校から指定公認された「泳ぎ場
」があり、夏休みには泳いでい
児童はカツパすがたで遊泳してい
た。清い流れはまたかすかすの川
魚をそだてた。ここに棲息する魚
の種類は、いうに数十をかぞえる
ことができたであろう。コイ、フ
ナ、ウナギ、エビ、カニ等は名を
あけるもやほである。学問上の魚
名が何であるか知らないが、その
名もなつかしく思い出される。

ミヨウブタ、カワバチ等も沢山い
た。それだから季節の如何を問わ
ず深いところには釣竿がならび、
浅い流れには投アミが水シブキを
たてた。釣といえは園府台地区を
流れる一帯には、夏季ともなると
イナ釣りか町の話題をすつかりさ
らつてしまふほどさかんだった。

らつてしまふほどさかんだった。
、の流れ、清らかな流れ、それ

はあたりには、たくまざる美しい
風情を添える。まつかな西空を
うつつした鏡のような水面に、さ
びしく浮かんだ一艘(そう)の
小舟。こんな、えもいわれぬ一
ぶくの絵のような夕景は、一日
の野良仕事をおえてかえるひと
びとに、こよないなくさめとも
なつたであろう。

そんなこんなで、住民にとつて
は、若いも若きも、男も女も、な
んらかのかたちで夷隅川とむす
びついていた。いふなれば精神
的にも物質的にも、この川は日
常生活の一部をなしていたも
のだった。

むかしの夷隅川とはそんな川で
あつた。したがつて当時の国吉
小学校々々の歌詞として、万木
の城山につづき夷隅川がうたい
こまれたのも単なる一山と川と
の合言葉「から着想されたの
でなく、必然の順序がふまれた
までであつたと私は信じたいた
である。

(つづく)

